

自主独立・地域密着・全員経営のDNA



岩手ハネダコンクリート株式会社
(奥州市)
代表取締役

高 橋 進

岩手ハネダコンクリート株式会社は、東京・日本橋に本社があった羽田コンクリート工業株式会社の子会社として、奥州市江刺玉里の現在地で昭和49年に創業し、お陰様で今年44年になります。旧江刺市の第1号の誘致企業でした。

当時は東北自動車道の建設に伴う旺盛なコンクリート需要を見込んでいたほか、江刺からの出稼ぎの方が多く働いていたこともあり、進出を決めたと聞いております。

私は奥州市水沢の出身で、大学卒業後は水沢に戻り、地元の税理士事務所で働いていましたが、縁あって平成元年に当社に入社し、昨年9月に代表取締役になりました。

入社直後に、親会社の本社勤務を命ぜられ、当時の社長の実家が茨城の結城市にあり、そこで下宿生活をしながら新幹線で毎日本社に通ったほか、関東の各工場の経理業務を見て回るなどの仕事を2年間経験し、江刺に戻り

ました。

当時の当社の経営幹部は親会社出身の方々に占めていましたので、地元出身で長期に基幹業務に携わり、かつ親会社や各工場とのパイプ役にもなれる人材を育成する目的だったのではないかと思います

独自技術の開発と地元顧客の開拓

当社は、道路新設拡張・宅地造成時の土留用や各種競技場のフェンス用、一般住宅の塀や花壇の外構用などのコンクリートの二次製品の製造・販売を主な業務としております。用途に応じた様々な形状や強度、軽量化を図った製品の供給が求められ、そのための技術開発力が必要で、特許競争が激しいのが当業界の特徴です。

当社でも親会社が多くの特許を持っていたほか、自社工場でも親会社出身者に教えられながら技術習得に努め、江刺発の特許も多く、

親会社に頼らない独自の気風が醸成されるようになりました。

これには理由があり、当社は一般的な製造業の進出企業と異なり、製品の供給先が外部の国内や海外市場ではなく、自動車道も含め、地元地域が供給先だったからです。多様な業種の地域のお客様の要望に因應するため、自社で開発し自社でお客様を開拓する必要があります。従って、東京の親会社の方針に従うというよりは、地域のお客様の要望に従うといった経営スタイルが求められ、子会社とはいえ、地域に密着した独立経営的な要素を持つようになりました。また、親会社も8割の株式を持っていましたが、そのような経営スタイルを理解しておりました。

親会社からの独立

ご承知のように、建設関連業界は、平成初期のバブル崩壊を経て冬の時代に入り、10年

代に入ると公共事業の縮小もあり、県内では企業倒産が相次ぎました。当社の経営環境も例外ではなく、多額の貸し倒れが発生したほか、一時100人を超えた従業員も半分以下の50人ほどに減りました。

当時私は管理部課長をしておりましたので、いわゆるリストラの推進側に回ったのですが、当時の50代の従業員からは、「俺はいいから、若いやつを育ててやってくれ」と、涙が出るほどありがたい言葉をかけてもらい、早期退職に応じていただきました。

また、親会社も好景気の時に様々な保険や積立金の準備をしていていましたので、貸倒金の処理や割増退職金の支払いなどの財務対応もスムーズに進めることができました。親会社の方針で強固な財務体質を構築することができたからこそ、業界全体が縮小する中で、独自の技術開発を進め、地域の様々な要望に応え、岩手県南地区を中心に経営基盤を固めていくことが出来たのだと感謝いたしております。

その後、業界の構造的不況の色合いが濃くなった20年代に入ると、親会社には合併の話が持ちあがっていました。そして平成22年の秋、親会社の合併を前に持ちあがったのが、東北の他県にある当社と同じような子会社を当社で吸収合併してくれないか、という話でした。

突然の話に戸惑いましたが、よく話を聞くと、どうやら業績の悪い他県の子会社を救済

してほしいということで、さもなければ、親会社が100%株式を持つ完全子会社になるか独立するかの二者択一を迫られました。

業績が悪く、しかも様子が分からない他県の会社と一緒になっていくはずがありません。これまでも、親会社とは一定の距離を置き、自主独立の気風がありましたので、会社の皆の意見も独立しか選択肢はありませんでした。しかし問題は独立資金の手当てです。皆で株式を持つにしても多額の資金が必要です。結局、会社が株式を引き受け自己株式を持つ「変形MBO方式」での独立を果たしました。独立にあたっては、資金面にとどまらず様々な独立手法の提案をいただくなど、最後まで伴走いただいた銀行さんをはじめ、関係者の方々に感謝いたしております。



奥州市江刺玉里の本社・工場全景

ます。

そして平成23年2月25日、東京の本社で独立の調印式を行いました。その席上、創業一族で社長の父親でもある相談役からは、「岩手ハネダの商号をこれからも使っているが、名を汚さないように頑張ってもらいたい」との激励をいただきました。親会社も地域に根を張り独立独歩の当社の組織風土をよく理解していたのだと思います。親会社とは独立後も友好な関係を保っております。

皆で磨きをかけて

誘致企業第1号としての進出から建設不況、そして独立と、これまで様々な出来事を経験してきましたが、当社が今日あるのも、地域の皆様そして親会社や金融機関の皆様のご支援の賜物であり、何よりも「会社は自分たちのもの」と考え、当事者意識を持って切磋琢磨してきた先輩諸氏を含めた働く仲間があつてこそのもと考えております。

独立から2週間後に東日本大震災が発生しました。あれから7年が経過しましたが、まだまだ当社が復興に力を発揮する必要があります。あるものと考えております。さらには、森林資源の保護に係る治山事業や圃場整備事業など、県内の一次産業の振興や県土の保全などの地域課題の解決に向け、これまで以上に皆で切磋琢磨し製品開発技術の向上を図り、更なる発展を目指していきたいと考えております。